かささぎ通信　第112号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2022年　3月　11日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年二月「森三郎の作品を読む会」では、「わらび餅」の読み比べ（『赤い鳥』[1932.7]と少国民文芸選『かさゝぎ物語』([1942.8]帝国教育会出版部）をしました。その後「白龍狸（はくりょうだぬき）」（『うぐひすの謡』[1943.8拓南社]所収）を読みました。

「わらび餅」は有明中将というとてもわらび餅の好きなお公家様の話です。毎日決まって、朝七つ、昼十二、夜九つずつ食べていました。中将は月野姫というお姫様と結婚することになりましたが、この奥方はわらび餅が大の苦手で、中将にわらび餅を食べることを制限します。大好きなわらび餅を十分に食べられない有明中将は、いつも浮かない顔をするようになりました。

ところが、ある春の日、北嵯峨へ鷹狩りに行き、家来たちとはぐれてしまった中将は、小さな茅屋根の家に一人で住んでいる十五六の女の子から、わらび餅を堪能するほど御馳走になります。そして女の子から、奥方がわらび餅を好きになる風変わりなおまじないを教わり、それを試すと、奥方は中将に以前通りわらび餅を食べさせ、自分もすっかりわらび餅が好きになり、二人は仲の良い夫婦になります。

その後、中将はあの女の子にお礼を言おうと出かけますが、茅屋根の家などありません。その跡らしきところには、一叢のわらびが青々と伸びており、女の子がわらびの精だったことを、中将は悟りました。

ところで、おまじないというのは「わらび餅」という言葉を三度唱えて奥方の鼻をつつくと、奥方の鼻先にわらび餅がくっついてしまうというもので、それを都で有名な陰陽師の安倍晴明の見立てで直させます。

過食にまつわる話と言えば、前号の「かささぎ通信」で「三條中納言」の話を報告したばかりです。森三郎の表現をたどってみると、これまでの彼の作品の特徴が所々にみられます。「目ぐすり」の竹藪の中の母子の住んでいた藁屋根の家の跡、「三條中納言」の医者と「わらび餅」の陰陽師の役回り、鼻の特徴を話題にした「みかん」「鼻のはれもの」などです。また、鼻先にソーセージがくっついてしまう「三つの願い」もヒントになったかもしれません。

今回（A）『赤い鳥』と（T）帝国教育会出版部『かささぎ物語』所収作の「わらび餅」を読み比べて、（T）はこれまで読み比べてきた作品と同じように、簡潔になっていることが分かりました。「中将がわらび餅を制限されるまでの話がなかなか進まないという印象があったけれど、読み比べてみると、その間が大事な気がした」「その間の表現の中に、中将という人間が浮かんでくる」「（T）版の話は粗筋だけになっている」など、集まったメンバーからは、省略の多い（T）版より「赤い鳥」版を支持する声が多くありました。

森三郎は『かさゝぎ物語』([1942.8]帝国教育会出版部）の後、『うぐひすの謡』(1943.8拓南社）を出版しています。この作品集の三郎自身の「あとがき」によると、「白龍狸」は「羽衣の伝説と、巌谷小波氏のお伽話『狸のから鼓』から得たイメージによってまとめたもの」です。正月を前にもち米を買うお金もない狸が、金の杵を拾いますが、それはお月様の中の兎が落した杵でした。兎は餅つき歌を歌って、その杵で米の入っていない空臼に一杯の餅をつき、代わりに杵を返してもらって月に戻っていきます。狸はその餅を皆食べてしまったので、お腹が膨れてポコンポコンといい音がするようになったという狸の腹鼓の由来話に仕立てられています。小波の『明治お伽噺』(1903,博文館）には武内桂舟の挿絵も入っていて、小波の時代の本の楽しさを味わいました。

「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』第5号が完成しました。「森三郎刈谷市民の会」10周年記念、「かささぎ通信」100号記念

主な内容鈴木三重吉から森家への書簡と刈谷の名産「白魚」／森銑三・よし・次郎兄姉と森三郎／十代後半の森三郎―川上児童楽劇園時代―

次回予定　二〇二二年四月八日（金）午後一時半～三時半

「虹の松原」の読み比べ（『赤い鳥』と少国民文芸選『かさゝぎ物語』）

「ものぐさ物語」（『うぐひすの謡』1943年所収）